

春の彼岸によせて

平成十三年三月 大乘寺 副住職 岡 光俊

今回は、ご自身の魂（たましい）の成長について見つめてみませんか。

お経には、人は何百何千何万回も生まれ変わって魂を磨くと説かれています。それほどの歳月が必要とされるほど、魂は成長しにくいようです。魂が成長しにくい原因は色々あるでしょうが、今回は日常の心の動きの中から探って見たいと思います。

お経に、驕りという言葉があります。自分は偉いんだと思ひ込む、未熟な人間であることに気がつかないということでしょう。ですから、誰のいうことも聞く必要がないのです。偉いという感覚ですが、社会的立場が高い、年上である、男であることなどが、偉いと思える条件のように考えがちです。しかし人は、年上であろうが年下であろうが、男性であろうが女性であろうが、いくら低い立場であろうが高い立場であろうが、皆自分が一番偉いと思っているようです。

ご自身はどうでしょう。妻や夫、子供のいうことを心より「ハイ」と聞き、即実行しているでしょうか。殆どのかたが夫、子供のいうこと、妻のいうことをすべて、いい加減に聞き流している自分が見えるのではないでしょうか。この、一見当たり前になっている日常の感覚が、魂の成長の妨げとなっているのです。

人はすべての基準を自分に持っています。自分自身が基準ですから、周りが自分の基準に合わすべきで、自分を改めることは必要ないのです。自分自身が基準ということ、今ではそれが正しい、よいことのように思われています。一人一人がそのような考えですから、夫婦であれ親子であれ、人が二人いるということは、基準が二つ、五人いると基準は五つということになる訳です。どうしても自分の規格に合わせようとすると、お互いの基準を言葉でぶつけ合う姿、即ち、口喧嘩の始まりです。

このような日常の姿を変えるために、どのようにすればよいのでしょうか。それは佛さまの知恵に触れることです。佛さまの知恵に触れることで、ご自身の基準、標準がどれだけズレているか気づくことが大切です。日常生活のなかで改めなければならぬことは、特に気がつきにくいものです、お経に説かれている言葉に沿って、ご自身の心と対していくことが肝要とされています。妻は夫に物解りのよい夫にと、夫は妻に気がつき優しければと、子供には努力してくれたらと、みんな成長を切望している心の叫びです。夫も妻も子供も、毎日全員成長しなければなりません。それを驕りおごは、他人のこのように思わせ、自分は成長しなくてよいと思ひ込ませるのです。

春の彼岸、いつものように、そういうことかと済ますことは、知ることには満足しただけで、なんのために知ったか、知る機会が与えられたかは解りません。知ったこと、注意を頂いたことは即実行して初めて自分が気づき、自分の魂たましいに入り込むことができます。

お経に添ってゆっくりと自分を見つめ、今日から毎日、ご先祖さまと供にお経を読み、心の養いをさせて頂き、ご先祖供養を正しく真心を持ってさせて頂くことにより、人としてのあるべき姿と意義を体験していかれるでしょう。そして、彼岸である彼かの岸、即ち、悟りの岸は近づき、生かされ、生きている関係が、より深く自然に心楽しく、感謝に満ちた日々と変わらせて頂く機会となることでしょう。